SFC ディスカッションペーパー
SFC-DP 2014-002

# 利他主義（altruism）の動機と成立構造について

岡部光明

慶應義塾大学名誉教授
okabe@kvp.biglobe.ne.jp

2014 年 6 月

# 利他主義（altruism）の動機と成立構造について

岡部光明

【概要】

利他主義とは、他人の幸せに関心を払う主義ないしそのための行動を指す。これは世界中の多くの宗教や文化に共通する伝統的な道徳ないし倫理基準になっている。本稿では、利他主義の動機ないし行動をどう理解すべきかについて、多様な分野（社会科学、生物学、神経科学等）の研究や実験結果を展望することによって多面的に考察した。その結果、人間は利己主義的動機に基いて利他的行動を示す場合もある一方、他人の利益を考慮して行動する面を確かに持つこと、利他主義（与えること）は人間の健康と幸福にとって良い効果を持つこと、などを述べた。

## はじめに

「自分にしてもらいたいように人に対してせよ」という格言がある。これは、洋の東西を問わず古くからみられるよく知られた倫理命題であり、黄金律（Golden Rule）と称される場合が多い[1]。それは、自分の行動を相手の尺度で評価することを事前に要請しているので、相手に対して広い意味で好意を持っていることが前提されている。つまり、自分の行動は単に自分のために行うのではなく、程度はともかく相手のために行動せよ、という要素を含んでいる。その発想を延長すれば、人間が自分のためでなく専ら相手のために行動する場合が考えられる。そうした行動は、利己主義（egoism)に対して利他主義（altruism）あるいは慈善（フィランソロピー、philanthropy）[2]などと呼ばれる。

本稿は、人間が持つこうした利他主義の動機ないし行動をどう理解すべきかを多面的に考察する試みである。１節では、まず黄金律と利他主義の関係を考え、次いで利他主義の普遍性や検討課題を指摘する。２節では、利他主義の一例としてのボランティア活動を取り上げ、その動機に関する研究例を紹介する。３節では、近年利他主義が多くの学問領域から研究されていることを指摘するとともに、人文学的・社会科学的な視点からの解明、自然科学的な視点からの解明をそれぞれ紹介する。４節では、利他主義に関する各種の実験結果を概観し、

[1] 黄金律の生成、意義、留意点などは別稿(岡部 2014b)を参照。
[2] 慈善（博愛）は、慈善事業などの表現が示唆する通り、個人よりも企業などが医療・福祉・環境地域活動に参加・協力することを指す場合が多い。これに対し、本稿では主として個人を基礎とする利他主義を扱う。

その含意を考察するとともに、利他主義を超えた一つの先端的な現代思想を紹介する。５節では本稿を要約する。

## １．利他主義の意義と検討課題

ここでは、まず黄金律と利他主義の関連を考える。次いで利他主義とは何かについてなされている議論とその論点を紹介し、本稿としての利他主義の捉え方を定める。

### (1) 黄金律と利他主義

古くから黄金律として知られる倫理命題「自分にしてもらいたいように人に対してせよ」は、直接的には自分に対する行動命題であり、その場合の条件が述べられているだけなので利他主義そのものではない。しかし、それは利他主義に深く関連する思想であり、また行動基準でもある。なぜなら、それは、自分の行動を相手の尺度で評価することを事前に要請しているので、相手に対して広い意味で好意を持っていることが前提されているからである。つまり、自分の行動は単に自分のために行うのではなく、程度はともかく相手のために行動せよ、という要素を含んでいる。その発想を延長すれば、人間が自分のためでなく専ら相手のために行動する場合になる。これが利他主義である。

**図表１　黄金率と利他主義の関係**

| 基礎条件 | 現れる状況 | 帰結 |
|---|---|---|
| 共感・感情移入<br>(empathy) | 相互性　＋　論理整合性<br>(reciprocity)　(consistency) | ・水平的（同値的）関係<br>・黄金律（Do to others） |
| 同上 | 相互性　＋　論理整合性　＋　同情<br>(reciprocity)　(consistency)　(sympathy) | ・相手に傾斜した関係<br>・利他主義（Do for others） |

（注）筆者作成。

黄金律と利他主義の関係をやや厳密かつ形式的に考えると、図表１のようになろう[3]。すなわち、先ず、ある人が他の人に共感ないし感情移入(empathy)するとしよう。すると、両者の感情は相互に対等なものとなり(相互性、reciprocity)、自分の感情と相手の感情は同一視できる状況(整合性、consistency)が発生する。つまり両者の間で水平的（同値的）関

[3] 以下で言及する幾つかの概念の詳細は岡部（2014b）を参照。

係が発生する。この状況で導かれる規範が黄金律すなわち「自分にしてもらいたいように人に対してせよ」である。これを簡潔に英語表現すれば“Do to others”[4]となる（図表１の上段)。 黄金律を理解するうえでは、従来から共感の原理（a principle of sympathy）が基本になっていた（Wattles 1996：114ページ）わけである。ただし、黄金律を単に論理整合性だけの形式論に閉じ込めてしまうならば、そのルールが本来的に持つ直観的要素は犠牲になる。黄金律はあくまで人間に対する尊敬を含むものである（同140ページ)。

この状況からさらに一歩進んで相手に同情心（sympathy)を示せば、それは相手に傾斜した関係となり、その結果、自分よりも相手に重心が移行する。その結果、利他主義に至ると理解できる。これを簡潔に英語表現すれば“Do for others”[5]となる（図表１の下段)。

なお、黄金律に対応する英語表現は“Do to others”という表現と“Do for others”という表現の二つがあるが、前者がより一般的に使われていること[6]に注目する必要があろう。なぜなら、それが黄金律をより忠実に表現しているからである。これに対して後者は、広義では黄金律を表現しているが、そこから一歩進めて利他主義にまで踏み込んでいる、と理解できる。ちなみに、明治学院大学が校是として“Do to others”でなく“Do for others”を採用[7]しているのは、利他主義の精神を明確に表現する意図があるためと推察される。

### (2)利他主義のさまざまな捉え方と主要論点

利他主義（altruism）とは、広く理解すれば、他人の幸せ（welfare）に関心を払う主義ないしそのための行動を指す[8]。これは、世界中の多くの宗教や文化に共通してみられる伝統的な道徳ないし倫理基準である[9]。

例えば、世界のほとんど全ての主要宗教（キリスト教、仏教、ヒンズー教、イスラム教など）は、その教義に利他主義を大切な道徳的価値として含んでおり、またそれを推進している。そして、非宗教的な色々な伝統においても、この考え方ないし行動基準（積極型の黄金律[10]）は一つの中核に位置している。この倫理基準は無私の心（selflessness）を意味しており、利己主義（egoism）や利己心（selfishness）の反対概念である。ただし、より厳密

---

[4] 正確に言えばDo to others as you would have others do to you.
[5] 正確に言えばDo for others as you would have others do for you.
[6] 岡部（2014b）を参照。
[7] 岡部（2014b）を参照。
[8] http://en.wikipedia.org/wiki/Altruism。なお本稿では、別途述べた理由（岡部 2014b：脚注9）により引用可能な条件を備えていると考えられるウエブサイト情報（英文ウイキペデイアなど）は引用する。
[9] 倫理が社会的規範として機能するうえで満たさねばならない条件としては、個人的感情に合致し直感的に自明な原則であること、合理的手続きであること、文化の一つになっていること、相互利益になる社会契約であること、社会的に有用であること、などが指摘されている（Gensler 2009：148ページ)。
[10] 岡部（2014b）を参照。

に考えると利他主義については様々な視点があり、その理解の仕方が非常に多様であることに驚かされる。

### 利他主義のさまざまな捉え方

まず、心理的視点に立った一つの極端な見解がある。すなわち、心理的利己主義(psychological egoism)と称される立場からみれば、どのような分けあい、援助、あるいは犠牲であっても、そうした行為をする者は個人的満足（personal gratification）というかたちで本来的な報酬（intrinsic reward）を得るので、それらの行為は真の利他主義と認めることはできない、という考え方がなされる[11]。また経済学でも、これと類似の議論がなされており、たとえ利他主義的に「行動」しても、その「動機」は利己主義的なものに帰着する、とされる（後述。付論 2 を参照)。

これに対して、人間は文字通り利他主義的考えをもって行動をする、と理解する見解がある。なぜなら、人間も動物（生物体）の一種であるから、他の動物と同様、種族保存のために自己犠牲をしてでも他の主体を助けて生存させる（つまり利他主義的行動をとる）という考え方である。これは上記見解と枠組みを全く異にするが一つの視点であり、現にこの線に沿った研究も自然科学系の分野から多くなされている。

### 主要論点

以上二つの対照的な主張からわかるとおり、「真性の」利他主義が果たして存在するのかどうかについて、そもそも両極端の見解が存在する。最も基本的には、人間を動物体としてみるか、それとも人間の社会的・文化的側面を重視して人間は他の動物と同一視できないと考えるか、である。そして仮に後者の視点に立つとしても（1）人間は「利益」に該当するものがなくても利他的行動をするのかどうか、(2) もしそうした行動をするのであればその動機は何か、(3) 行為する者が受け取る報酬ないし見返り（それは多様な形態をとりうる[12]）が果たして「利益」に該当するものかどうか、などを明確化する必要があり、結論はそれらの結果によって直接左右される。さらに次のような問に対しても解答が求められる：(4) 利他主義は、自分以外の誰かのために自分の何か（例えば時間、エネルギー、所有物など）を犠牲にすることを条件とする必要があるのか、それともそうした犠牲を伴わなくとも（例えば相手に対する思いやりだけでも）成立するのかどうか。(5) 利他主義的「行動」と利他主

---

[11] http://en.wikipedia.org/wiki/Altruism

[12] 例えば、報酬は、直接的利益でなく、寄附行為に対する認知度の上昇など間接的利益の場合もある。また (a) 自分に対してよりも他人に対して行う方が自分自身の気持ちを良くする、(b)自分に対する他人の尊敬が高まることによってより良く扱ってもらえる、(c)感情と行動の非整合性からくる圧迫感から逃れられるなど、よく考慮した上での自己利益（enlightened self-interest）が動機になる場合もある（Gensler 2009：148 ページ)。

義的「動機」は区別するべきかどうか。(6) 利益を受ける「他人」は特定の個人（個体）なのかそれとも集団なのか、もし後者の場合その範囲は何か（一定の社会的集団か、それとも人類全体か)。そして (7) 人間が利他的行動をするのは一時的であり圧倒的に多くの場合は利己的行動をすると考えるのかどうか。

このように考えると、人間が果たして利他主義行動をするのかどうか（するとすればなぜか、どの程度かなど）について結論を述べるのは容易でない。しかし、少なくとも、人間は、場合によっては利他主義的行動をすると理解するのが自然である。例えば、火事になった家に人が残されている場合、命の危険を冒して家に飛び込んでまで人命を救助するとか、溺れている人を自分の命の危険を冒してまで助ける、といった例は少なくないからである。また、献血をする行為は多くの人が行う行為であり、これは明らかに利他主義的行動に該当する。さらに、東日本大震災（2011 年 3 月）後には、多くの人がボランティアとして自弁で東北地方に出向いて現地の人を助ける行動を見せたのも、人間が利他主義的心理を持つことを示唆している。

**利他主義の定義**

以上の議論を踏まえると、人は、たいていの場合、利己心で動くが、それだけでなく「場合によっては、他人の幸せそれ自体を最終目的として関心を寄せる」と考える（Sober and Wilson 1998：228 ページ）のが適切になる。つまりこれは「ほとんどの人が常に利他的である」とか、「何人かの人はほとんどの場合利他的である」と考えるのではなく、人は広範な利己心（selfishness）を持つ一方、利他心も併せ持つ存在であり、したがって行動動機は多元的である、とする見方である（同)。本稿では「利他主義」をこのような広い視点から考えることにしたい。

つまり利他主義という場合、狭い意味での利他主義（事前的にも事後的にも利己的な要素を全く含まない場合）と、広く捉えた利他主義（事前的または事後的に利己的な要素を含む場合）の二つに区分できるが、本稿ではこの両方を議論の対象とする。

確かに、前者だけを真性の利他主義と捉える見方もある。例えば、哲学者の中には「他人の利益を考慮する一方、隠れた動機を保持することなく行動する意志（willingness）があること」をもって利他主義とするケースがある（Andreoni et al. 2008：134 ページ)。そこでは (1) 他人を考慮すること（当人の犠牲を伴うかどうかは問わない)、そして (2) 行動自体で利他主義を説明するのではなくそこに利己主義的な隠れた動機がないこと（もし利己主義的動機があるとしてもその動機だけではないこと)、が条件となっているので、利他主義が狭く（厳格に）捉えられている。この点いかにも哲学者らしい。しかし、多くの学問領域では、利他主義をより広く捉えたうえで考察しているので、本稿でもそれに従うことにする。

## ２．利他主義の一例としてのボランティア活動

利他主義の動機と行動が一体となった身近な一例としてボランティア活動（volunteerism）がある。その活動を概観しておくことは、利他主義を考える上で具体的なイメージを与えるとともにその論点について多くの示唆を与えるので、本節ではボランティア活動をいちべつすることにしたい。ボランティア活動は各国において広くみられるため研究例も数多い。ここでは、その概要を取りまとめた最近の研究成果である Mannino et al.(2010)に依拠して以下記述する。

### ボランティア活動の意義と動向

まず、ボランティア活動とは、人々が償いや報酬を期待することなく他人のために時間と労働を進んで割くことを指す。インフォーマルな活動の場合もあれば、形式が整った組織体による場合もある。これは社会活動（social action)、すなわち個人が他人ないし社会の利益のために目的と動機をもって関与する活動の一形態である。

その活動は近年世界中で増大しているのが特徴的である。その理由は、社会がそれを好意的に見ていること、すなわち社会がボランティア活動の価値を認め、それを奨励していることによる面が大きい。なぜなら、ボランティア活動をする個人は利他的であって他人の気持ちが理解でき（compassionate)、そして人間的に寛大である、などと見られているからである、とされている。

ボランティア活動に特徴的なのは、ボランティア活動を義務付ける法律はないこと（そうした活動をしないことに対する罰則や社会的制裁があるわけでもないこと）である。それにもかかわらず、人々は自分の時間やエネルギーを注ぎ込んで（経済学的な表現をすれば「機会費用」が伴うにもかかわらず）自ら選んでそれを行っている。この点が特徴である。つまり人々の自発性が重要な背景にある。

### ボランティア活動の動機

ボランティア活動に関する重要な研究テーマは幾つかあるが、そのうち人々をボランティア活動に駆り立てるものは何か、つまり活動動機は何かという問題が最も興味深い問題である[13]。Mannino et al.(2010)によれば、ボランティア活動は参加者のやる気が支える現象（a motivated phenomenon）と位置づけることができ、この見方は広範な研究によって支持される（同 129 ページ）としている。

---

[13] その他に解明すべき問題として、人々がなぜ特定のボランティア活動を選択するのか、ボランティア活動を継続しようとするのはなぜか、などがある。

そしてその動機は、人間の社会的文脈（人間は何らかの共同体に所属しているという意識と現実があること）から発生するとともに、人間内部の感情からも湧き上がるものである。したがって、それら両要因がボランティア活動への参加自体を左右するほか、活動の形態、期間を決めることになる（同 129 ページ)。具体的にいえば、ボランティア活動に参加する場合の動機は (1) 何らかの個人的目標の実現と他者への貢献が一体化した人間の心理、(2) 個人的および社会的なアイデンティティの獲得、(3) コミュニティへの連結性、の３つが基礎になっている。また活動単位としては、個人のレベル、集団のレベル、の両方がある。そして、ボランティア活動集団に所属しているという心理面の役割も見逃せない意味を持っている。

いずれにせよ、現代社会では重要な社会サービス（コミュニティサービス）がボランティアによって提供されているので、ボランティア活動は社会にとって有益である。そうしたボランティアサービスの実施計画を策定する場合に必要なことは、効率的（effective）であること、サービス提供者に満足感が伴うもの（satisfied）であること、長期間活動可能な（long-serving）ボランティア労働力を確保できるものとなっていること、などである（同 141 ページ)。

## ３．人文学的・社会科学的・自然科学的解明

### 利他主義を理解する基本的視点

われわれ人間は、他の人の利益になることをなぜする（場合がある）のか。これが基本問題である。具体的にいえば (1) 他人の利益になることをするのはそれが単に自己利益にかなうからなのか、それとも (2) 他人の利益になるように本来われわれは行動する動機をもっているのか、という問題である。そして (3) もし他人の利益になるように行動するとすれば、どのような他人（家族、友人、国家、人類）の場合か、という問題も随伴してくる。以下、対照的な視点である (1) および (2) をやや敷衍して考察しておこう。

まず (1) のような行動は、一見利他主義に見えるものの自己利益の手段として他人の利益になる行動をすることを指すから、実体的には利己主義（egoism、self-benefit)的行動である。この場合、多様な自己利益の形態があることが実証的に明確に確認されている（Batson et al.2010：106 ページ)。それには二つのタイプがある。一つは、利他主義的行動をすることによって何らかの報酬（rewards）を獲得する場合である。例えば謝辞、称賛、名誉、プライド、金銭の受領、相互関係の維持などである。もう一つは、懲罰（punishment）の回避である。すなわち、罰金、攻撃、社会的責任違反に対する制裁、恥さらしなど（マイナス要因）を回避するために利他主義的行動をとる場合である。

これに対して (2) のような行動は、その最終目的として他人の利益になることをする場合であり、真性の利他主義といえる。つまり一人の人間が、自己利益達成の手段としてでは

なく、他者の幸福（welfare）を究極的な目的として行動することである。果たして人間にはそういう動機や行動がほんとうに存在するかどうか、これは興味深い問題である。この問いに対し、哲学、社会科学、行動科学などの視点から比較的古くから研究されてきており、近年（ここ 30〜40 年）は自然科学の領域からの研究も加わってその視野が急速に広がってきている。

以下（1）では、このうち哲学や社会科学の視点からの研究動向を整理し、(2) では自然科学の観点からの理解をまとめる。なお、このような広範かつ複雑な研究領域を正当に概観するのは筆者の能力をはるかに超えるので、以下は断片的かつ印象的なものにすぎない可能性があろう。

### （1）人文学的・社会科学的解明

#### 哲学

まず、利他主義の考察において古い伝統をもつ哲学をみよう（以下図表２を参照)。哲学といってもむろん千差万別の思想があるが[14]、ここではそのうち最も大きな影響力を持ち続けている思想の一つである功利主義（utilitarianism）を取り上げる。

この思想の特徴は「個人の究極的目標は自分自身の利益を得ることにある」と考える点にある。したがって、他人のことを考える時でも、それが自分の幸福を増大する結果を生むかどうかの観点だけから見る。つまり、一見他人のことを考えて行動しているように見えても、そうした行動は結局自分の利益のためである（それに帰着するはずである）と判断する。したがって、利他主義の観点からみると、人間は利己心だけを持ち、利他心をもたない存在である、と結論される（Sober and Wilson 1998：2 ページ)。

#### 経済学

次に、上記の功利主義思想を直接継承する経済学をみよう。経済学の視点からの利他主義の研究は当初、博愛主義（philanthropy）をどう位置づけるかと言う視点から 1960 年代に始まり、その後、紆余曲折があって現在に至っている（その略史は付論１を参照)。しかし、経済学の内容が近年著しく多様化[15]する中にあっても、その根幹領域の一つであるミクロ経済学においては、人間は利己心（自分の効用最大化）だけを目的に行動する主体であることを前提し、それをもとに一つの社会像を構築している点に特徴がある。

また、ミクロ経済学に含まれるこうした功利主義の思想を受けて近年発展してきたゲーム

[14] 例えば、利他的行動は人間の責務だとする主張がある。
[15] 最近の経済学の動向と問題点については岡部（2014c）を参照。

## 図表２　各種学問分野からみた利他主義についての見解

| 学問分野 | 具体的領域 | 考え方・分析方法 | 人間の利他心の有無の判断 |
|---|---|---|---|
| 哲学 | ・功利主義 | ・個人の究極的目標は自分自身の利益を得ることにある。<br>・他人のことを考える時でもそれが自分の幸福を増大する結果を生むかどうかの観点だけから見る。 | ▲人間は利己心だけを持ち、利他心をもたない。 |
| 経済学 | ・ミクロ経済学<br>・ゲーム理論 | ・人間は利己心（自分の効用最大化）だけを目的に行動することを前提、それをもとに社会像を構築。<br>・一見利他的な行動をする場合でも、結局は自己利益の追求であるという分析結果が多い（ゲーム理論）。 | ▲人間は利己心だけを持ち、利他心をもたない。 |
| 心理学 | ・社会心理学 | ・利他的行動によって自己利益が生じる場合があるが、それはあくまで意図せざる結果。人間が社会的存在であることに着目すれば、人間は他者の利益になることを目標として行動する理由がある。<br>・ここ 30 年間の研究はこの仮説の妥当性を強く支持。 | △人間は自己利益のために多様な行動をする一方、他者の利益を究極目標とした行動をとる場合がある。 |
| | ・ポジティブ心理学 | ・人間がより良い真に幸せな生き方をするための方法を心理学の研究成果をもとに探求する。<br>・自分の労力・時間・お金などを他人に与えることによって他人の幸せを考える姿勢を持つことが長期的にみて高い満足度をもたらす（頑健な実験結果）。 | △人間は自分が保有する各種資源を他人に与えることによって幸福度を高める面があるので、利他心を持つ。 |
| 生物学 | ・進化生物学 | ・適者生存の原則（ダーウインの進化説）は生物個体についてだけでなく生物のグループ（集団）にも適用可能（グループ間でも相互に競争して勝ったグループが生き残る）と前提。<br>・自己の生存や生殖を犠牲にしても、当該集団の他の個体を生き延びさせることによって集団を生存させる。 | △人間も生物である以上、この理解を適用可能でありしたがって人間も、人類生存のために利他心を持つ<br>・ただし、生物集団が生物個体と同様に一つの有機的単位として行動する、とみなせる根拠が不明確。 |
| 神経科学 | ・生理学/化学/物理学/心理学/コンピュータ科学/医学などから接近 | ・慈善寄付を行えば、脳の快感を知覚する部分が反応するという実験結果が存在。 | △人間の利他的行為は神経学的な基礎をもつので、人間には利他心が備わっている。 |

注１．▲ 人間は利他心をもたない。
　　△ 人間は利他心を持つ、または持つ場合もある。
注２．著者作成。出典は本文を参照。

理論においては、一見利他的な行動をする場合でも、結局それは自己利益の追求が究極的な動機になっている（岡田 2008：153〜155 ページ; 2011：260〜261 ページ)、という分析結果が多い（付論２を参照)。つまり、ここでも、人間は利他的「行動」をする場合があるものの、それは利他的「動機」の存在を表すものではなく、動機はあくまで利己的なものである、と主張される。これに対して、理論ではなく経済心理学の実験をした結果によれば、利他主義は、必ずしも利己心に帰着させる必要はないもののやはり合理性理論（rational theory）の枠内で説明できる（Khalil 2004）とする主張もある。

このように経済学では、その対象領域や分析手法が近年大きな発展を示してきたものの、そこでは依然として利他心をもたない人間が仮定される一方、利他的行動も結果的には利己的行動として「説明」できるという議論がなされるなど、功利主義の思想が一貫して踏襲されている[16]。

**心理学**

以上みた経済学に対して、心理学では一般にこれとはやや異なる見解が支持されている。例えば、社会心理学においては、利他的行動によって自己利益が生じる場合があるとしても、それはあくまで意図せざる結果であること、そして人間が社会的存在であることに着目すれば、人間は他者の利益になることを目標として行動する理由があること、などが主張されている。そしてこうした仮説（真性の利他主義は存在するという仮説）の妥当性は、最近 30 年間の各種の心理学実験の結果から強く支持されている（Wattles 1996：119 ページ)。

また、心理学における一つの新しい分野であるポジティブ心理学[17]においても、自分の労力・時間・お金などを他人に与えることによって他人の幸せを考える姿勢を持つことが長期的にみて高い満足度をもたらすことが頑健な実験結果として得られている（Seligman 2002：43 ページ；ピーターソン 2012：37〜39 ページ)。さらに、自分にとって楽しい活動[18]（それは束の間の楽しさをもたらすに過ぎない）よりも、他人の幸せを考える慈善活動[19]の方が永続性のある満足が得られることも実験的に確立された命題になっている（ピーターソン同）。

このように、心理学では人間は自分が保有する各種資源を他人に与えることによって幸福度を高める面があることが確認されているので、人間は利他心を持つ、と結論付けられてい

---

[16] 詳細は岡部（2014c）を参照。
[17] 人間がより良い真に幸せな生き方をするための方法を心理学の研究成果をもとに探求する心理学の一分野。
[18] 例えば、友人と遊んで時間を過ごす、映画を観る、チョコレートパフェを食べるなど、大半の人が共通して愉快だ（楽しい）と感じることがら。
[19] 例えば、近所の高齢者のために雪かきをする、弟妹の宿題を手伝う、家族のために洗濯をするなど。

る[20]。ここで注意する必要があるのは、自分が保有する各種資源を他人に与えれば高い満足度につながるのは、あくまで結果論（事後的に発生する状況）であり事前にそれを目標として行動しているわけではない点である。この点は、人が利他主義的行動をするのはその報酬を事前に予想しているからであると理解する経済学（ミクロ経済学やゲーム理論）の発想と異なっている。

### （2）自然科学的解明

利他主義的行動がどのような人間社会においても、そして時代のいかんにかかわらず見られるのであれば、それは文化の差異を超え、生物体としての人間の普遍的な行動によるものである、と理解することができる。したがって利他主義は人体に何らかのかたちで本来的に具備されているはずである、つまり人体生物学（human biology）の視点からみた何らかのメカニズムによって生じるもの、という考え方が成り立つ（Pfaff 2007：１章）。

このように、人間のいくつかの行動パターンは人間の脳に普遍的に埋め込まれているとする視点にたって利他主義的な行動を解明しようとする研究が近年、自然科学の分野とりわけ進化生物学や神経科学の領域から活発化している[21]。

#### 進化生物学

まず進化生物学（evolutionary biology）の観点からどう理解できるかをみよう（前掲図表２を参照）。それは、博物学者ダーウイン（1809- 1882）の進化説を基礎とした説明である。すなわち、彼の説いた「適者生存」の原則は生物個体についてだけでなく生物のグループ（集団）にも適用可能であることがまず前提される。つまり、生物は個体が相互に競争して生き残ろうとするだけでなく、グループ間でも相互に競争し勝ったグループが生き残ろうとすることが前提される。この場合、個体は、当該集団の他の個体を生き延びさせることができるならば、自己の生存や生殖を犠牲にしても集団を生き延びさせる行動を取る、と理解される。

そして人間も生物である以上、こうした理解を適用可能であり、したがって人間も人類生存のために先天的に利他心を持つ、という説明である（Pfaff 2007：１章および 161〜162

---

[20] 心理学の研究によって利他主義を主張する場合、研究者は「世界は友好的で住みやすい場所であってほしい」という自らの願望が込められている場合もあることが指摘されている。しかし、科学的な研究で何が真理かを解明しようとする場合には、そうした落とし穴に入らないように注意する必要がある（Sober and Wilson 1998：8〜9 ページ）。

[21] 利他主義という場合、その研究対象が生物一般であるか、それとも人間であるかによって相当次元が異なる。このため(a)進化論的な利他主義（evolutionary altruism。一般の生物体が種の存続を図るため他の個体に対して自分の犠牲を払う行動）、(b)心理学的な利他主義(psychological altruism。人間が他者の幸せを増大することを目的とした行動）を区別して扱う考え方（Lishner and Stocks 2008）もある。

ページ；Sober and Wilson 1998：6〜9 ページ)。つまり、利他主義は、種ないし自己が属する集団の保存に「保険」を掛ける機能を果たすものとして存在することになる（Boehm 2009：157 ページ)。

これは、利他主義が人類社会において、倫理体系、哲学、宗教のいかんを問わず、そして時代を超えて広くみられることを説明する一つの方法である。ただし、生物集団が生物個体と同様に一つの有機的単位として行動する、とみなせる根拠が不明確だとする批判がなされている[22]。これに対しては反批判がある。すなわち、人間社会においては、社会規範が報酬と処罰を規定する（しかもそれは面倒な手続きを経なくても課すことができる）ので、それが人間行動を規定する可能性が大きく、したがって、集団は一つの有機的単位とみなしうる（Sober and Wilson 1998：337 ページ)、という反論である。これは、人間行動においては、単に生物的要素だけでなく文化ないし社会規範の重要性を再認識させるものといえる。

**神経科学**

上記の進化生物学に基づく議論は、結局人間の脳の働きないし人間の遺伝子に原因を求める理解方法である。それをさらに系統的に展開しようとするのが神経科学によるアプローチである。神経科学（neuroscience）とは、神経システムに関する研究を行う自然科学の一分野であり、生理学・化学・物理学・心理学・コンピュータ科学・医学など、既存の多くの学問領域から接近するのが特徴である。

そうした研究においては、例えば人間が慈善寄付を行えば、脳の快感を知覚する部分が反応する、という実験結果が存在する。したがって、人間の利他的行為は神経学的な基礎をもつので、人間には利他心が備わっている、という理解がなされる（Pfaff 2007：2 章)。より一般的にいえば、利他主義は人間にとって不愉快な感情（怒り、敵対心、憎悪、復讐心など）を抑制する一方、望ましい感情（幸福観、安心感）を増大させる効果を持つので、自分自身にとって恩恵をもたらす感情コントロール手段として作用する（Post 2009：180 ページ）ことになる。神経科学はこのような視点から人間の利他主義を説明している。

**(3)「受けるよりは与えるほうが幸いである」**

上記の人体的現象は近年とくに注目されており、利他主義はそれを実行する主体に精神的かつ肉体的に大きなメリットをもたらすことが実証されている。「他人を助けることは、自分に価値がある感覚をあたえるとともに、社会的役割を遂行していることを意味し、そして一般的に自分の健康を増進させる」(Post 2009：183 ページ)。またボランティア活動に関

[22] 利他主義による便益を受けるのはどのような個人ないし集団か、そして利他主義の「コスト」はどのように評価するのか、を明確にするため、進化生物学の観点に立った解析的なモデル分析（Kerr et al. 2004）もみられる。

する研究においても、その活動が活発になれば、ストレスが軽減され、その結果、健康へ好影響を与えている（心臓病が少ない）という結果が報告されている（Post 2009：184 ページ)。この視点を検証する先端的論文を 20 編以上収録した Post(2007)は、ボランティア活動等の援助行動の効果をさまざまな角度から分析、「その結果、身体的健康、健康増進、病気予防、そして長寿の関係は、然るべき留保条件をつけた上で、いまや主流派医学研究者の研究において確立された認識になっている」と結論付けている。自分の時間やエネルギーを無償で与える利他主義的行動は幸福感を高める(Luks 1988)うえ、精神上・健康上も利益があることが長年にわたる臨床心理学など多くの研究によって比較的早い時点から確認されている(Luks and Payne 1992；Weir 2011)。

**図表３　受けるよりも与えることをより高く評価する発言例**

| 発言者 | 発言 |
|---|---|
| 老子<br>(中国の紀元前 5 世紀頃の思想家) | 人に与えて、己いよいよ多し[1]。 |
| イエス・キリスト | 受けるよりは与えるほうが幸いである[2]。 |
| アッシジの聖フランシス<br>(中世イタリアの聖人) | 我々は与えることにおいてこそ受け取ることができる[1]。 |
| ウィンストン・チャーチル<br>(英国の元首相) | 人は得ることで生活（living）を営むことができるが、人に与えることで真の人生（life）を生きることができる[1]。 |
| ウォルト・ディズニー<br>(ディズニーランド創設者) | 与えることは最高の喜びである。他人に喜びを運ぶ人はそれによって自分自身の喜びと満足を得る[1]。 |
| 二宮尊徳<br>(江戸時代の農政家・思想家) | 奪うに益なく譲るに益あり[3]。 |
| 高橋佳子<br>(現代の宗教思想家) | 幸せは、もらう幸せ、できる幸せ、あげる幸せ、へと人生において段階的に高まってゆく[4]。 |

1. “Law of Giving-Give and You Will Receive”(http://www.successinspired.com)
2.『新約聖書』「使徒言行録」20 章 35 節。
3.二宮（1933：51 ページ）。
4.高橋（2008：117 ページ）。
（出所）岡部（2013：３章 17 節）により作成。

これをさらに大きな観点からみると、「受けるよりは与えるほうが幸いである」（『新約聖書』「使徒言行録」20 章 35 節）という古来語られた箴言は、単に道徳の観点から良いとされるだけでなく、健康と幸福の維持にとってよい「戦略」になる可能性があることが現代の科学的研究によって確認された、といえる。

さらに視野を広げるならば、このように受けるよりも与えることをより高く評価する思想は、古今を問わず、そして洋の東西を問わずみられることがわかる（図表３を参照）。そこでは「我々は与えることにおいてこそ受け取ることができる」（中世イタリアの聖人アッシジの聖フランシス）などの表現に代表されるように、「受け取る」ものが明示されていない場合も少なくない。このような場合、受け取るものは物品や金銭ではなく、より大きい満足、あるいは本当の喜び、ないし幸せであると解釈できる（岡部 2013：138 ページ）。それがさらに身体的な健康にも結びつくことは容易に理解されよう。

倫理ないし道徳は、このようにして人間の歓びや健康に結びついている。古来そうした規範が重視され、また永続してきた一つの理由は、この相互関係によって支えられたため、といえるのではなかろうか。

## ４．各種研究の評価と課題

以上概観した利他主義に関する各種見解はそれぞれどの程度妥当性を持つのであろうか。それを判断するには、各種の実験を行ってその結果から判断するのが科学精神に則った方法である。本節では、各種実験結果が示す最大公約数的な理解を紹介するとともに、それが何を意味しているかを考察する。

### 実験結果からみた利他主義

人間が利他主義的「行動」を示す可能性は確かにある（例えば、その行動の結果が自己利益になるような場合）。しかしこれは行動が利他主義的であっても、利他主義的「動機」に基づく行動ではないので、「真性の利他主義」と考えることはできない。

では、人間は果たして利他主義的「動機」を持つ存在なのか。これを検証するには「真性の利他主義」（狭義の利他主義）を定義し、その存在の有無を何らかの実験によって確認するのが妥当な方法である。その場合の利他主義は、前述したとおり「他人の利益を考慮する一方、隠れた動機を保持することなく行動する意志があること」（Andreoni et al. 2008：134 ページ）をもって定義する必要がある。

利他主義をこのように定義し、その有無を確認した多くの実験結果を報告した一つの研究（Andreoni et al. 2008）に依拠しつつ実験結果を要約すると次の 3 点になる。すなわち第一に、実験結果によれば、人間がこのように定義した利他主義を持つ可能性があることが示唆されている。第二に、しかしながらその要因が何なのかは確定できない。つまり、利他主

義が文化的要因によるか、心理的成長の過程において獲得されたものか、それとも先天的に他人に配慮する性癖をもつのか、などはなお明確になっていない。そして第三に、利他主義が他の行動動機とどう絡み合っているのか、これについての結論は得られていない。

**実験結果の含意**

これら三つの結論は、人間の利他主義的動機について非常に重要なことを示唆している。第一に、人間は真性の利他主義的な動機も併せ持つ存在であることである（ただしその程度に関しては色々な議論がありうる）。この結論は、別の幅広い研究（Batson et al.2010）によっても確認された頑健な結果になっている。すなわちBatson et al.(2010)によれば、1990年時点における社会学、経済学、政治学、生物学などの研究によれば、利他主義は理論およびデータから判断して真性の利他主義（究極的に他者の利益になる行動）とより整合的である、とされている(同113ページ)。そして、その後20年経過した時点でも、この結論は不変である（同)。人間は、生存する必要上明らかに利己主義的行動をするが「人間の行動が利己主義によって完全に支配されており利他主義的な究極動機は存在しない」とする見解は、体系的な理論によっても、また明確かつ決定的な観察事実によっても支持されたことはこれまで決してなかった（Sober and Wilson 1998：8ページ）わけである。

第二は、そうした理解をする以上、幾つかの重要な課題が生じることである。一つは、経済学、心理学、行動科学、生物学などにおいて従来仮定されてきた「利己主義の普遍性」（universal egoism）という前提を見直し、それに代わる仮定を置いて人間を理解する必要がでてくることである。つまり人間は、われわれが考えてきた以上に社会性を持つ存在であることを認識する必要がある。われわれは単に自分のことだけを考えるのではなく、他人のことを考える能力と可能性を持っているので、人間の特性（nature）と可能性（potential）を究明するためには従来の仮定の妥当性を再考し、人間ないし社会の研究においては何か新しい対応をする必要が生じている。

例えば経済学の場合、この方向に沿った一つの有効な対応は、伝統的に用いられてきた二部門（市場と政府）モデルによる社会の理解方法に代えて、非営利民間部門（非利己的に行動する主体）を加えた三部門モデルによって理解を進めることが考えられる（岡部 2009：図表3；岡部 2014c)。

もう一つは、人間はなぜ他人に共感する能力（capacity to feel emphatic concern）をもつのか、共感力の源泉はどこにあるのか、の解明である。生物（とくに哺乳類）は種族保存のため、自分のことだけを考えるのではなく親族に対して利他的に行動することが広く知られているが、果たして人間の行動もその一環として理解してよいのか。また遺伝子との関係が強調されるとしても、人間の生後の環境がその関係を変化させるのではないか（社会環境はその影響を低下させるのではないか)。さらに、人間社会は哺乳類一般よりも高度な文

化を持つので、共感力の源泉は文化的な要因や社会規範（social norm）がより大きな影響を与えるのではないか。これらの疑問を明らかにするには、進化生物学や神経科学の観点からさらなる研究が要請される一方、進化心理学や社会学からの研究も必要になる。つまり、社会科学の領域と自然科学の領域の双方から今後さらなる研究が必要になる。

第三は、真性の利他主義的行動がその行為者に対して精神的歓びを与え、肉体的にも健康を増進させる効果を生むのは、あくまで事後的な結果としてであり、事前にそれを期待して利他的行動をする場合とは区別する必要があることである。何らかの報酬を得ることを事前に意識した後者のような行動は、広義の利他的行動であっても、それは動機に利己性が伴っているので利己主義の一環と理解する必要がある。

真性の利他主義に上記のような恵み（blessings）がもたらされるためには相手を思う心（愛）が必要であり、そしてそれが５つの条件を満たす場合である（Post 2009：186- 187ページ）という指摘もある。その条件とは、思いの強さ（intensity）、広範さ（extensivity）、継続性（duration）、十分さ（adequacy）、 そして純粋さ（purity）であり、このうちとくに純粋さが不可欠の条件とされる（同）。つまり、真性の利他主義には利己的な動機が含まれていてはならず、それは純粋な愛（利害関係が全くなく見返りを求めない愛）であり、それこそ感情の最高の形態である（同）、とするのはうなずける。

第四は、人間は利己心と利他心を併せ持つ存在であり、しかも孤立した生命体ではなく社会的な存在であるので、利己心、利他心、社会的関係の三者は果たしてどう関係しているのか、そして個人ならびに社会にとってこれら三者をどう関係づけるのが望ましいか、を究明する必要性が大きいことである。

こうした視点からの研究は現時点でほとんど見当たらないが、貴重な例外としてFehr and Fischbacher（2003）がある。彼らは、利他主義者と利己的な個人がどのように協力できるかどうかが社会（人間の協力組織）のあり方にとって極めて大切であることに着目、興味深い結論を導いている。すなわち、環境条件のいかんでは(1)少数の利他主義者が多数派の利己的個人を協力に導く場合がある（その結果、社会全体として協力者が増加する）、(2) 逆に少数の利己的個人が多数派の利他主義者の行動を変節させてしまう場合もある（その結果、社会全体として協力者が減少する）、などを報告している。一方 (3) 遺伝子に基礎を置く現在の進化生物学ではこれらがなぜ生じるのかを説明することができない、したがって (4) これらを解明するには進化生物学だけでなく文化進化論、そして遺伝子と文化の相互関係の進化論などからの研究が必要である、と主張している（同）。

それを達成するには、各種学問領域にブリッジを掛けて利他主義の理解を深めれば、そこから人間行動の望ましいあり方を導くことができるかもしれない。しかしそれは、容易であるまい。それに代わる方法としては、人間が自己啓発することによって利他心を高め、その結果、社会をより望ましい方向に導くことが考えられる。こうして利他心を延長したかたち

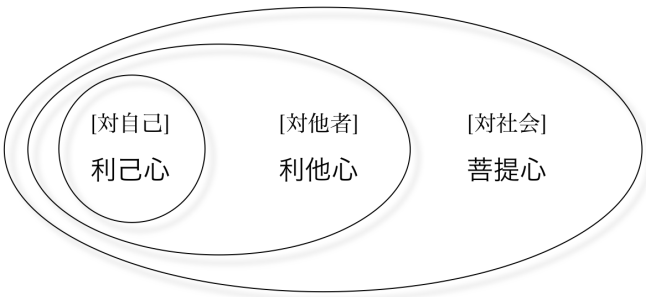
の一つの注目すべき宗教思想あるいは宗教的実践方法がある。以下、その概要を紹介しておきたい。

**一つの先端的な人間学**

以上各種の見解を展望した結果として最後に述べるべき第五の点は、人間は本来的に利己心と利他心のほか、それらを包摂する菩提心を持つ存在であるとする人間観が提唱され（高橋 2008，2010，2011，2013)、それが個人の幸せにとっても社会の問題解決（調和）にとっても有効性が示されつつあることである。

ここでいう菩提心とは「本当の自らを求め、他を愛し、世界の調和に貢献する心」（高橋 2008：4 ページ）である。これは、哲学と宗教実践の境界線に位置する発想であり、菩提心は利他心を一層拡張した人間の心と理解することができる。なぜなら、菩提心は「自分を成長させ、完成させようとする[利己心]だけでなく、それ以上に、その自分をはみ出して他を思い[利他心]、全体のためにはたらこう[社会的貢献]とするこころ」（同 4〜5 ページ、[ ] 内は引用者による追記）であり、人間は利己心、利他心のほか、結果的に社会貢献の心をも併せ持つ[23]とされるからである（図表４を参照)。

図表４　利己心、利他心、そして菩提心




（注）筆者作成

この思想をより実践的にするために高橋(2008)は、日本人が古来より心を寄せて親しみ、生き方をも学んできた自然の姿に例えられるこうした心（12 の菩提心[24]）あるいは天使の心

[23] 社会を構成するのは自分の効用最大化を目的に行動する個人であるという前提に立つ経済学（あるいは経済学研究者）にとっては、こうした理解は容易に受け入れ難いかもしれない。しかし(1)経済学におけるそうした前提はあくまで分析便宜上の前提（仮定）に過ぎないこと、(2)したがってそれが人間の真実を表すとか、それが正しい人間理解の方法である、などを意味するわけではないこと、に注意することが大切である（岡部 2012：46〜58 ページ)。人間の本性を究めるには、こうした前提にとらわらない、より幅広い考察が不可欠である。

[24] 月の心、火の心、空の心、山の心、稲穂の心、泉の心、川の心、大地の心、観音の心、風の心、海の心、太陽の心、の合計 12。

が私たちの心の奥深くに潜んでいると説いている。その菩提心を各自が発掘し、それを解き放てば「自由ですがすがしく、エネルギッシュで忍耐強く、慈しみと包容力に満ちて、謙虚さを少しも失わない」自己が現れてくる（同７ページ）としている。そして、われわれ人間は、各自の仕事（職業）や色々なはたらきを通して社会を構成しているので、個人の行動動機が変革すれば社会に新たな現実（調和した社会）を生み出すことになる（同７ページ）と説いている。

より具体的にいえば、これまで世界を牽引してきた従来の価値観の転換がいま必要であり、そのために上記思想とその実践が問題解決の道を開く新たなパラダイムになる（高橋 2013）、という主張である。すなわち、現代社会に蔓延した利己主義（自分さえよければそれでよい）、刹那主義（今さえよければそれでよい）、唯物主義（目に見えるものだけしか信じない）を「時代の三毒」と認識し（ＧＬＡ総合本部出版局　2012：58～59 ページ）、それを超えるには一人ひとりが意識の転換によって根源的な（魂からの）エネルギーを発揮することが必須であるとしている。そして、そのビジョンを『JAPAN NEXT- １億総自己ベストの時代』という書名を付けた書籍（高橋 2013）のほか、全国的な講演会を実施して呼びかけている。

この場合に特徴的なのは、他の多くの思想ないし宗教とは異なり、個人が自己変身する手段（ワークシート）も同時に提供していること（高橋 2013：3 章）である。そして、それにしたがって自己変革を遂げた多くの実践者が、個人の成長という意味でも社会への貢献という意味でも、現に大きな成果を上げていることが報告されている（高橋 2013：1 章）。

この思想は個人レベルでのすがすがしい生き方という意味での幸せ（ミクロ）と、社会としての幸せないし発展（マクロ）の双方を同時に達成する思想ということができる。その思想には先端性があるだけでなく、(1) 個人主義的である、(2) 合理的である、(3) 実践的である、(4) 社会性を持つ、などの点で現代社会にマッチしたユニークなものといえよう。その思想と実践が今後社会に広まれば、日本が抱える各種社会問題の解決に大きく資する可能性があろう。これらの詳細は岡部（2014a：3 節）を参照されたい。

なお、人は深化成長するにつれて、何を歓びと感じ、幸せと思うのかが変わってゆくものであり、それは「もらう幸せ」から「できる幸せ」へ、そして「あげる幸せ」へと段階的に深まってゆく、という興味深い洞察も示されている（高橋 2008：117 ページ。前出図表３を参照）。ちなみに、この観点から「大地の心」を理解すると、それは大地による献身と恵み、すなわち他人のために尽くす歓びを知る心（布施心、贈与の精神）であるので、図表４で示されるとおり、12 の菩提心にはそうした利他心（あげる幸せという高度な幸せ）が確かに含まれることになる。

## ５．結論

本稿の主要論点を要約すれば次のとおりである。

(1) 古くから黄金律として知られる倫理命題「自分にしてもらいたいように人に対してせよ」をさらに延長すれば、人間が自分のためでなく専ら相手のために行動する場合、すなわち利他主義（altruism）に行きつく。利他主義とは、他人の幸せ（welfare）に関心を払う主義ないしそのための行動を指す。これは、世界中の多くの宗教や文化に共通する伝統的な道徳ないし倫理基準になっている。

(2) 人間がなぜ利他主義的行動を取るのかについては、二つの対極的な見解がある。一つは(a)人がどのような利他主義的行動をしても、その行為者は何らかの直接的または間接的な見返りを得ることを期待しているので、真の利他主義は存在しないという見方である。もう一つは(b)人間は他人の利益を考慮する一方、隠れた動機を保持することなく行動する意志を持ち、それを反映した行動をする（人間は真性の利他主義的動機を持つ）という見方である。

(3) この二つの見解のうち、(a)の見方は功利主義哲学やその流れを継承する経済学でみられるのに対して、(b)の見方は心理学などの実験結果によって支持されているほか、進化生物学や神経科学など人間を一つの生物体として理解する観点からも支持されている。

(4) 人間は(b)の観点から理解することが実験的にも広く支持される見方である以上、(a)の見方をなお踏襲する学問（とくに経済学）は、その前提を見直して新しい方向での展開を模索する必要がある。

(5)「受けるよりは与えるほうが幸いである」（『新約聖書』「使徒言行録」20 章 35 節）という古来語られた箴言は、単に道徳の観点から良いとされるだけでなく、人間の健康と幸福にとって良い効果を持つことが現代の科学的研究によって明らかにされている。この金言の普遍性と永続性は、こうした相互補強関係による面もあると考えられる。

(6) 人間は利己心と利他心のほか、それらを包摂する菩提心（本当の自らを求め、他を愛し、世界の調和に貢献する心）を持つ存在であるとする注目すべき人間観が近年提唱され、それが個人の幸せにとっても社会の問題解決（調和）にとっても有効性を持つことが示されつつある。この思想と実践が広まれば、各種社会問題の解決にとって道を開く新たなパラダイムを提供する可能性がある。

## 付論１　経済学における利他主義の研究（小史）

経済学における利他主義の研究をFontaine（2008)に依拠して簡単に振り返ると次のようになる。

その研究はまず1960年代にスタートした。その結果、一見「非経済的」とみられる博愛主義も、個人の「効用」についての理解を修正すれば個人の効用最大化という経済学の枠組みを適用して理解できる、という議論になった。すなわち(1)個人の効用は従来個人間で独立しているとされていたが効用は相互に依存関係にある（自分が与えることによって相手の効用が増大すればそれは自分の効用を増大させるという従来とは異なる形の効用関数に置換すればよい）と考える、そうすれば（2）博愛主義的行動も従来の枠組みによって首尾一貫した論理で説明可能である、という認識が示され（1974年のベッカー論文)、これが一般的な理解になった。

しかし、一部の経済学者（1973 年のセン論文）はそれだけでは不十分であり道徳的な側面も見逃せない行動要因になっていることを主張したほか、経済学以外の分野の研究者（とくに哲学者）も加わって、より一般的な利他主義という観点から共同研究がなされた（1975年のフェルプス論文)。そこでは、利他主義は単に自己利益モデル（self-interest model）によって理解するのではなく、自己利益を越えて複雑さと曖昧さ（vagueness）を持った現象であるとみる必要があり（例えば献血行為の理解には新たな枠組みが必要であり)、また心理学の視点などからの研究も必要、と指摘された。

その後、人間を一つの生物とみる視点からの研究(進化生物学の視点)が導入されたほか、経済学の論理で説明可能とする見解（経済学帝国主義）が再登場したり、また非利己性（unselfishness)の理解には各種の利己的な行動動機以外の要素を考慮することが不可欠、とする見解などが入り乱れることとなった。

その後1980年代になると（1）個人は2種類の効用関数（利己心を示す効用関数、所属集団の効用を示す効用関数、つまりeconomic manとmoral manという二面性）を持つとする考え方、(2) 個人の効用関数には慈善活動に伴う公共財も含まれるとする考え方、(3) 社会は2種類の人(利己性で行動する人、倫理性で行動する人)で構成されているとする考え方、（4）コミュニティ（家族をはじめ、都市、国までも含む）のメンバーには利他的行動が要請される行動基準（忠誠心）が存在するという考え方、(5) 人には人間性（humanity）がありそこに利他主義も含まれているとする考え方、など多様な仮説が登場した。

しかし、経済学者は概して一つの枠組みによる統一的理解を好む傾向が強く、このため上記のような広い視点に立って捉えること（上記の4や5）には、他の社会科学者に比べて居心地の悪さを感じ、あまり乗り気でなかった。そうした状況下、アメリカ経済学会が 1993年の年次総会で「利他主義の経済学」(Economics of Altruism)という分科会を設けたため、それ以降は関連研究が急増、すべて合理主義的に説明しようとしたベッカーでさえも「人間の行動動機は狭い前提で捉えるのではなく、より実り多い価値や好みによって左右される」

との認識を示すようになった。また実験の重要性が高まったのも大きな特徴であった。

経済学の視点からは、まず二つの対極（一方で家族レベルの利他主義があり、その対極として市場レベルの利己主義がある）のどこに注目すべきかを明確にする必要がある。そして利他主義というテーマは経済学にとって最も根幹となる人間の行動前提が問われていることを意味している。こうした状況下、経済学はいまその挑戦を受け、本来の対応力を示そうとしているが、今後どういう方向に向かうのかは定かでない（an open question）のが現状である。

## 付論２　利他的行動と利己的動機：ゲーム理論的分析

人間の利己主義を前提とする主流派経済学では、人間が仮に利他主義的な行動をしても、その動機は結局、利己主義的なものである（利己主義的な動機しか持たなくとも一見利他主義的行動を取る場合があることを理論的に示すことができる)、という主張がなされている。これは、ゲーム理論的分析において次のように示される。なお、以下の記述は岡田（2008：153～155 ページ）に依拠している。

まず、二人の個人（個人１，個人２）がお互いに贈り物をするというゲームを考える。個人は、自分自身の財の消費量のみに関心があり、純粋に利己的な動機しか持たないとする。そして 2 種類の財（$x_1$ と $x_1$）の消費量に対する個人の効用関数を

$$u\ (x_1\ ,x_1) = x_1\ x_1$$

とする。出発点において、個人１は財の組み合わせ(5,1)を持ち、個人２は財の組み合わせ(1,5)を持っているとする。個人の戦略は

Ａ：自分の多く持っている財の 1 単位を相手に無償であげる。

Ｂ：何もしない。

の 2 通りであり、ゲームの利得行列は図表５で与えられるとする。

この場合、図表５によれば、個人にとっては何もしないＢ戦略が支配戦略であり、行動の組（Ｂ,Ｂ）がゲームの唯一のナッシュ均衡点[25]であることが分かる。ナッシュ均衡点では、

**図表５　贈り物ゲームの利得行列**（数字は効用を示す）

**相　手**

[25] 相手が戦略を変更しない限り、どのプレーヤーも自分だけが戦略を変更しても利得を増加できないような戦略の組み（プレーがそこから動かない状態）のこと。

自　分

| | A | B |
|---|---|---|
| A | 8，8 | 4，10 |
| B | 10，4 | 5，5 |

（出所）岡田（2011：154 ページ）。

個人はお互いに贈り物をしないから効用はともに５である。これに対して、二人が互いに贈り物をすれば、二人の効用はともに５から８に増える。

このことから、この贈り物ゲームは、囚人のジレンマ[26]と同じ構造を持つことがわかる。つまり、二人の個人が見知らぬ関係であり贈り物をする機会が一度しかない状況では、１回限りの囚人のジレンマと同様に「何もしない」というナッシュ均衡点が実現する。

しかし、繰り返しゲームの理論によれば、一定の条件を満たす場合[27]には、二人が互いに贈り物をすること、すなわち行動の組（A，A）が採用されることによって別のナッシュ均衡点が実現する。つまり、この場合、相手に無償で贈り物をするという一見、利他主義的行動をするが、それは、繰り返しゲーム理論の観点からは各個人の利得最大化（利己主義的）行動原理から説明できる。

［引用文献］

岡田　章（2008）『ゲーム理論・入門 人間社会の理解のために』有斐閣。

岡田　章（2011）『ゲーム理論［新版］』有斐閣。

岡部光明（2009）「経済学の新展開、限界、および今後の課題」明治学院大学『国際学研究』36 号、29- 42 ページ。
＜http://gakkai.sfc.keio.ac.jp/publication/dp_list2009.html＞

[26] 互いに協調する方が裏切り合うよりもよい結果になることが分かっていても、皆が自身の利益を優先している状況下では、互いに裏切りあってしまう、という状況（ジレンマ）に陥っていること。
[27] 二人の関係が友人のように長期的な関係であり、また現在の消費量と将来の消費量に対する評価がさして異ならないような状況のもとで、しっぺ返し戦略（相手から贈り物をもらったらこちらもお返しに贈り物をするという戦略。オウム返し戦略）を取る、などを仮定する場合。

岡部光明（2012）『現代経済学を超えて―私の経歴と考え方の発展―（明治学院大学最終講義）』慶應義塾大学出版会。

岡部光明（2013）『大学生の品格―プリンストン流の教養２４の指針―』日本評論社。

岡部光明（2014a）「個人の『幸せ』は社会とどう関連するか」明治学院大学『国際学研究』45 号、65- 89 ページ。

岡部光明（2014b）「『自分にしてもらいたいように人に対してせよ』―黄金律の生成と発展」慶應義塾大学 SFC ディスカッションペーパーSFC-DP2014-001。[近刊]
<http://gakkai.sfc.keio.ac.jp/publication/dp_list2014.html>

岡部光明（2014c）「最近の経済学の動向について：特徴、問題点、対応方向」慶應義塾大学『KEIO SFC JOURNAL』Vol.14 No.1。

ＧＬＡ総合本部出版局（編）（2012）『神理の言葉 2012』ＧＬＡ総合本部出版局。

高橋佳子（2008）『12 の菩提心―魂が最高に輝く生き方』三宝出版。

高橋佳子（2010）『魂の冒険―答えはすべて自分の中にある―』三宝出版。

高橋佳子（2011）『魂の発見―時代の限界を突破する力―』三宝出版。

高橋佳子（2013）『1 億総自己ベストの時代―人生の仕事の見つけ方』三宝出版。

二宮尊徳（1933）『二宮翁夜話（福住正兄筆記）』岩波新書、岩波書店。

ピーターソン、クリストファー（2012）『ポジティブ心理学入門：「よい生き方」を科学的に考える方法』宇野カオリ訳、春秋社。（Christopher Peterson, A primer in positive psychology, Oxford University Press, 2006.）

Andreoni, James, William T. Harbaugh and Lise Vesterlund (2008) “Altruism in experiments,” The New Palgrave Dictionary of Economics, Second Edition, Steven N. Durlauf and Lawrence E. Blume, eds. Palgrave Macmillan, pp.134-138.

Batson, C. Daniel, Nadia Ahmad, and E. L. Stocks (2010) “Four forms of prosocial motivation: egoism, altruism, collectivism, and principlism,” David Dunning, ed. Social Motivation (Frontiers of Social Psychology), Psychology Press, pp.103-126.

Boehm, Christopher (2009) “How the golden rule can lead to reproductive success: a new selection basis for Alexander’s ‘indirect reciprocity’,” in Jacob Neusner and Bruce Chilton, eds. The Golden Rule: Analytical Perspectives, Studies in Religion and the Social Order, University Press of America.

Fehr, Ernst and Urs Fischbacher (2003) “The nature of human altruism,” Nature 425, 23 October, pp.785-791.

Fontaine, Philippe (2008) “Altruism, history of the concept,” The New Palgrave Dictionary of Economics, Second Edition, Steven N. Durlauf and Lawrence E. Blume, eds.

Palgrave Macmillan, pp.123-134.

Gensler, Harry J. (2009) "Gold or fool's gold? Ridding the golden rule of absurd implications," in Jacob Neusner and Bruce Chilton, eds. The Golden Rule: Analytical Perspectives, Studies in Religion and the Social Order, University Press of America.

Kerr, Benjamin, Peter Godfrey-Smith, Marcus W. Feldma (2004) "What is altruism?" Trends in Ecology & Evolution 19(3), March, pp.135-140.

Khalil, Elias L. (2004) "What is altruism?" Journal of Economic Psychology, 25(1), February, pp.97-123.

Lishner, David A., and E. L. Stocks (2008) "Altruism," International Encyclopedia of the Social Sciences, 2nd edition, William A. Darity, ed. Macmillan Reference USA, Detroit, Mich., pp.87-88.

Luks, Allan (1988) "Helper's high: volunteering makes people feel good, physically and emotionally," Psychology Today, October.

Luks, Allan, and Peggy Payne (1992) The Healing Power of Doing Good: The Health and Spiritual Benefits of Helping Others, Fawcett.

Mannino, Celia Anna, Mark Snyder, and Allen M. Omoto (2010) "Why do people get involved? Motivations for volunteerism and other forms of social action," David Dunning, ed. Social Motivation (Frontiers of Social Psychology), pp.127-146.

Pfaff, Donald W. (2007) The Neuroscience of Fair Play: Why We (Usually) Follow the Golden Rule, Dana Press.

Post, Stephen G., ed. (2007) Altruism and Health: Perspectives from Empirical Research, Oxford University Press.

Post, Stephan G. (2009) "The golden rule in its idealistic formulation: benefits for the moral agent," in Jacob Neusner and Bruce Chilton, eds. The Golden Rule: Analytical Perspectives, Studies in Religion and the Social Order, University Press of America.

Seligman, Martin E.P. (2002) Authentic Happiness: Using the New Positive Psychology to Realize Your Potential for Lasting Fulfillment, New York: Free Press.

Sober, Elliott, and David Sloan Wilson (1998) Unto Others: The Evolution and Psychology of Unselfish Behavior, Cambridge, Mass.: Harvard University Press.

Wattles, Jeffrey (1996) The Golden Rule, Oxford University Press.

Weir, Kirsten (2011) "Golden rule redux," American Psychological Association SCIENCE WATCH 42(7), p.42.
<https://apa.org/monitor/2011/07-08/golden-rule.aspx>